

Lagrangian point

-Telepathy-

木下 雄二 Kinoshita Yuuji | 浦野 貴識 Urano Kisato

2019年2月8日[金] - 2月24日[日]

11:00~19:00 / 月曜休廊 / 金曜日のみ20:00迄

主催・企画:愛知県立芸術大学 大崎研究室

協力:Gallery PARC

「ラグランジュポイント -テレパシー-」

本展「ラグランジュポイント」は、愛知県立芸術大学油画専攻の在学および卒業生を紹介する企画として開催してきました。彼らが日本の中間地点「愛知」という場所で思考したこと、表現しつつあるものを紹介することで彼らの「視点」を考察する試みです。

これまでの過去4回、表現の強度を練り上げつつある卒業生や特殊な様態の表出しつつある学生などを紹介してきましたが、5回目となる本展では前回(2017年)同様に「何かを発見し始めた(ような)」作家を紹介する場として、木下雄二と浦野貴識の2名を紹介いたします。木下雄二は「他者に対して行う様々なアプローチや、反対に他者が私に対して与える影響等について」考えることから制作し、また浦野貴識は彼女のイメージソースとなっているディスプレイや什器の「丁寧で誠実な“語り”を鑑賞体験として与えられる」経験から知覚に関する問題を取り上げています。二人の作品の本質はまるで異なっていますが、彼らの制作の過程はまるで「テレパシー」を発する訓練のように、また自分のパルスを試しながらチューニングするように制作しています。彼らの表現を通して、関西でも関東でもない日本の中間地点の魅力を発見する機会になれば幸いです。

(大崎のぶゆき / 美術作家)

「Lagrangian point(ラグランジュポイント)」とは、Gallery PARCの会場提供による大学協力展のひとつとして、愛知県立芸術大学 大崎のぶゆき研究室による主催として開催するもので、2014年の「Lagrangian point」、2015年の「Lagrangian point -パースペクティブカスタマイズ-」、2016年の「Lagrangian point -To Form-」、2017年の「Lagrangian point -Drive on the Halfway-」に続き本展で5回目の開催となります。

本展「Lagrangian point -Telepathy-」は、浦野貴識と木下雄二の二人展として構成されています。

2階展示室にインスタレーションを展開させる浦野貴識(うらの・きさと / 1996年 愛知県生まれ)は、商用に見られるディスプレイや什器といったしつらえや形式への興味を出発点とする作品を展示しています。私たちはこうしたディスプレイを目にした時、それが目的(商品販促)のためだけにデザインされた(軽薄かつ希薄な)舞台セットであることを諒解しながらも、同時にそのセットで語られる物語を受け取り、時に積極的に読み込んでしまうことの矛盾に無自覚でいます。浦野は、その矛盾を批判するのではなく、そこに生じるリアリティを「ある」ものとして取り出し、拡張することで、「わからないけれど、わかる:わかるけれど、わからない」の存在に目を向けさせます。

木下雄二(きのした・ゆうじ / 1994年 奈良県生まれ)による《Language games》は、3階の写真とテキスト、4階の映像によって構成されています。「対話」をモチーフとした本作品は、コミュニケーションのプロセスに使用される言語を一旦「立体」へと置換され、再び言語(メモ)に戻す構造を持っています。ここに可視化されるのは互いが想像のみで進めるディス・コミュニケーションのカタチであり、まるでそれこそがこのゲームの面白さのように見えるかもしれません。しかし、目の前のガムを介した不気味で一方的なコミュニケーションが、実は普段の私たちの言語によるものと同様の構造であることを発見することになります。

この2名の作品はいずれも自身を取り巻く「わからないけれど、わかる:わかるけれど、わからない」ものに注視し、そのことについて思索しているように思えます。また、どちらもそこに「正しさ(答え)」を探すのではなく、自らに生じた「問い」が、「果たして問いなのか?」について自問自答するかのように作品制作に取り組んでいるように思えます。

2階

浦野 貴識 URANO Kisato

《 instance(Thomas and Tereza) 》

2019 ミクストメディア

消費行動へいざなう商業施設のディスプレイや仕器のレイアウト。または屋外広告。

生活の中で度々目撃するであろう、その装置たちのコントラストの効いたイージーなイメージや蠱惑的な態度、繰り返される同音同義のメッセージには辟易する人が多いかもしれない。

しかし彼らは、人間の身体や無意識を徹底的に規格化した姿かたちで私たちに対して実に丁寧に誠実な“語り”を鑑賞体験として与えられる。

そんな日常のリアリティの象徴ともいえるディスプレイ達を視覚表現の“語り”として、聖性、内と外など根源的な人間の知覚に関する問題に接続を試みる。

【作品についてのメモ】

私は自身の制作を「例示」や「例え話」の方法と仮定しています。私たちは他者と分かり合うために日常生活で例え話をしたりします。内的な抽象概念を過去に起きた出来事や慣習、体験を参照し、発話によって具体性を持たせることは、あなたとわたしの存在と距離を共有する一つの方法であり、親しみの表出だと考えます。私はその方法を転用し、立体作品として提示します。

永劫回帰の世界ではわれわれの一つ一つの動きに耐えがたい責任の重さがある。(中略)もし永劫回帰が最大の重荷であるとすれば、われわれの人生というものはその状況の元では素晴らしい軽さとして現れるのである。

《 instance(Tomas and Tereza) 》で取り扱っている大きなモチーフの一つに、ミラン・クンデラ著『存在の耐えられない軽さ』という小説があります。

この作品の登場人物たちは、自己のアイデンティティの在り様を複雑な恋愛関係を通して肯定的に行動することを選んだり、または否定し続けることで何か高いところを目指したり、もしくはそうした二元的な思考から離脱することを選択することによって何かを見出したりしてゆくのですが、しかし結局それが無意味なものとなされたりします。

だが重さは本当に恐ろしいことで、軽さは素晴らしいことであろうか？

物語を空間に再提示する。

そこで、私ができるただ一つとして「例示」します。

本作品では、この「重さ:軽さ」「肯定:否定」をめぐる恋愛劇を踏襲しつつ、以前から関心を持っていた商業施設に見るディスプレイや販売仕器にストーリーを語らせることを試みます。コントラストを過剰に効かせたイージーなイメージや、繰り返される同音同義のメッセージ。それらの持つ存在の軽さは、時に私たち(鑑賞者)をいたたまれない気分にもさせますが、同時に、ありふれた日常のリアリティの質量がここに表れているのではないかと考えました。

私たちの消費社会において、無味無臭で途方もないメロドラマや、レディメイドな仕器たちはすべて意味があり、かつ無意味です。増殖するストーリーのいくらかはあなたへの親しみの方法と生の肯定であると同時に、すべては可能性の保存にすぎません。

引用:『存在の耐えられない軽さ』ミラン・クンデラ 千野栄一訳 集英社文庫

【C.V】

1996 愛知県生まれ

2018 愛知県立芸術大学 美術学部油画専攻四年在籍

展覧会

2018 「MOTIVATE」 愛知県立芸術大学芸術祭

2017 愛知県立芸術大学×常滑市『鈴浜藝塾』滞在制作

- 「IN SPACE」学食二階次元 愛知

2016 「ルーレント今池」名古屋市内ウィークリーマンション企画

- 「せっせっせーのよいよい展」ギャラリー彩 愛知

2015 「プレプレその後展」ギャラリー矢田 愛知

3階・4階

木下 雄二 KINOSHITA Yuji

《 Language games 》

2019 写真、テキスト、映像(13:59)

まず、どちらか一方がガムを口に含み、頭に思い浮かべた「何か」を造形します。

それをもう一方に見せます。

見た側は、それが「何か」を想定し、それにしりとりで続く「何か」を造形します。

個人の主観により、ガムに味がなくなるまで続けます。

以上を1ゲームとします。勝敗はありません。

私は、「他者」という存在について探究することをテーマに創作活動を行っている。

私が他者に対して行う様々なアプローチや、反対に他者が私に対して与える影響等について考え、そうした行為・行動などを擬似的に行う(もしくは受ける)。

その結果、生まれた物体、ないし記録や資料を作品として提示する。

こうした思考方法から、自分と他者の関係を社会の縮図として捉え、日常の些細な事柄から社会に孕む様々な問題について考察し、制作しようと試みている。

【C.V】

1994 奈良県生まれ。

2017 武蔵野美術大学 油絵学科版画専攻卒業

2018 愛知県立芸術大学大学院 美術専攻科 油画・版画領域在籍

展覧会

2018 第43回全国大学版画展(町田市立国際版画美術館・東京)

- 3大学/タイ・日本国際交流版画展(シラパコーン大学・タイ)

- 拡張する知覚(愛知県立芸術大学 芸術資料館・愛知)

- メソッドの考察(愛知県立芸術大学 学食2F次元・愛知)

- 第13回タグポート・アワード(世田谷ものづくり学校・東京)

2017 第42回全国大学版画展(町田市立国際版画美術館・東京)

- 第6回NBCメッシュテックシルクスクリーン国際版画ビエンナーレ(有楽町朝日ギャラリー・東京)

- DxPressions/Printmaking(名古屋造形大学 Dギャラリー・愛知)

- 東京五美術大学連合卒業・修了制作展(国立新美術館・東京)

- 卒業制作展(武蔵野美術大学・東京)

2014 グループ展「再結集展」(Antenna Media・京都)